

# 港建設予定地内遺跡発掘調査概報Ⅱ

——根ノ木田 フケ田平 北ヶ迫——



0年3月

島根県教育委員会

# はじめに

石見空港は石見西部の益田市市原町を中心とする低丘陵地帯 150haが対象地とされております。この造成工事に先立ち、島根県教育委員会は島根県土木部の委託を受け、三カ年計画で埋蔵文化財調査を実施しているところであります。本年度はその2年次にあたり、平成元年7月より12月までの期間で、予定地の東側を中心に点在する遺跡（第8、9、10地点）と西側にある遺跡（第3、5地点）の調査を進めてまいりました。

調査の結果、古代から中世に属する祭祀にかかわる遺跡や江戸時代末ごろの瓦窯など、この地域における人々のくらしの一端を垣間見る資料を得ることができました。以下はその概要であります。この小冊子が、この地域における歴史の解明に少しでも役立てば幸いです。

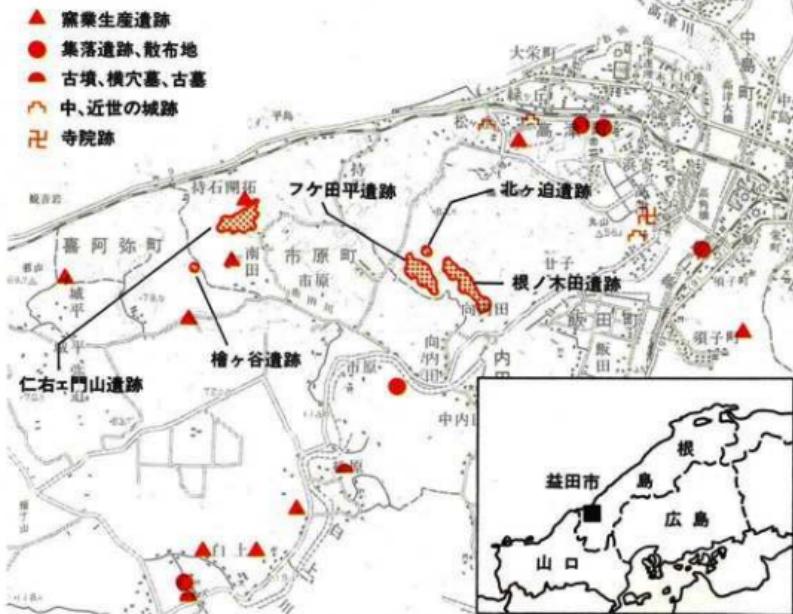


図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

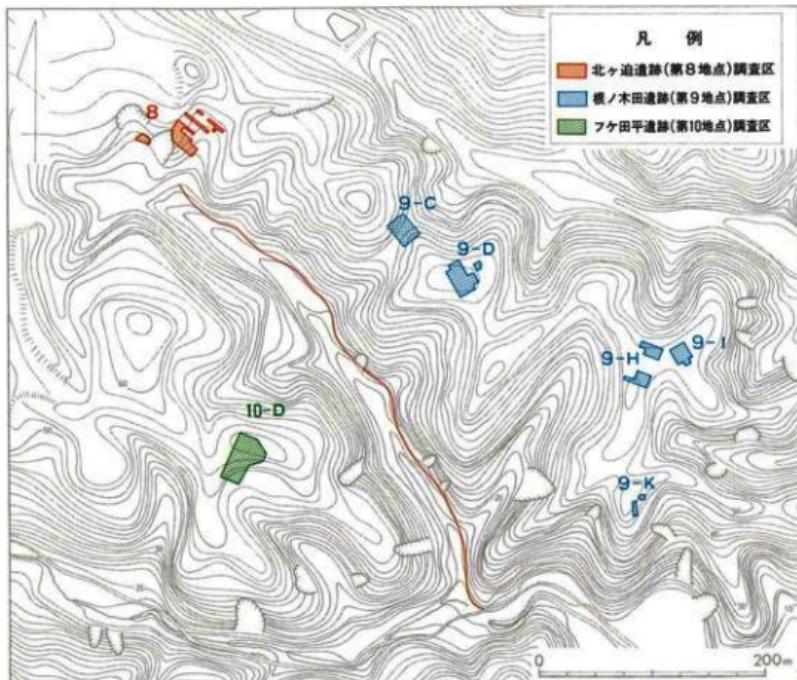


図2 平成元年度 発掘調査地点位置図

## 調査のあらまし

今年度は仁右立門山遺跡の範囲確認調査、檜ヶ谷遺跡、北ヶ迫遺跡、根ノ木田遺跡、フケ田平遺跡の本調査を実施しました。

北ヶ迫遺跡(第8地点)は7月から10月に約300m<sup>2</sup>を調査、根ノ木田遺跡(第9地点)は約1,200m<sup>2</sup>の範囲確認の継続及び本調査を11月から12月に実施し、フケ田平遺跡(第10地点)は約1,000m<sup>2</sup>の範囲確認の継続と本調査を7月から10月に実施しました。檜ヶ谷遺跡(第5地点)は当初古墓と考えられていましたが、調査の結果、それを裏付ける遺構・遺物とも確認できませんでした。

仁右立門山遺跡(第3地点)は範囲確認調査を完了するには至らなかったため、次年度以降に継続して行う予定にしています。

## 位置と環境

益田市は島根県の西端に位置しており、南には中国山地から続く山並みが平野部までせまり、北に日本海を臨みます。この海に注ぐ河川に沿って、いくつかの沖積地が存在していますが、その中でも高津川と益田川は石見地方最大の平野を形成しています。

この平野には古くから人々が住み、多くの遺跡が知られています。特に、古墳時代には平野の東側にスクモ塚古墳、小丸山古墳といった県下でも有数の古墳が造られ、また、中世においては石見の雄として勢力を張った益田氏が三宅御土居などに居館を構えるなど、当地が早くから石見地方の中心的地域であったことを物語っています。

さて、石見空港建設予定地は平野の西側、市街地からやや離れた丘陵地帯に位置しています。これまで周辺でいくつかの近世以降の窯跡が知られているのみでしたが、前年度からの発掘調査によって次第に多くの遺跡が明らかになりました。特に、平野の遺跡からは窺い知ることのできない、丘陵地における人の営みを示す遺跡を検出しました。以下はその概要です。

### 根ノ木田遺跡（第9地点）

C地区ではこれまでに堤防状の遺構が確認されていましたが、今回の調査でこれが山道（土橋）であることが分かりました。土橋はC区以外にも1ヶ所確認されていますが、いずれも丘陵の鞍部に造られています。C区の土橋は土を0.8mほど盛っており、長さ15.5m、上端の道幅は0.6mです。

山道は図のように北から南に



図3 根ノ木田遺跡 山道、土橋位置図



写真1 根ノ木田遺跡 C区土橋全景（北から）

かけて尾根を縫うように縦走しています。基本的に山筋の上を歩くようになっていますが、山が大きく迂曲するような場所では尾根を避けて斜面に道を通しており、なるべく遠まわりをしないように配慮がされています。

現在では山に入る人も少なく、山道も草木に埋もれるままとなっていますが、地元の人の話では比較的最近まで使用されていたようです。付近からは炭焼き窯も確認されており、この山道はそうした炭焼きに従事した人や周辺に住む人達の薪取りに欠くことのできないものであったのでしょうか。

□区は□区の土橋から山道を南に登り詰めた丘陵上の平坦面に位置しています。□区には明確な遺構はありませんでしたが、浅い落ち込みを検出し、その埋土中および周辺部から多くの土器片を発見しました。そのおもだったものを図にあげていますが、須恵器の蓋坏（图4-1～3）、水瓶（同4）、鉢（同6～8）、灰釉陶器の長頸壺（同5）、土師器・壺（同9）、土師質土器・坏（同10、11）などバラエティーに富んだものとなっています。

蓋坏の坏身には高台が付き、坏蓋のつまみには擬宝珠と輪状の2種類があります。水瓶の外面には頸から胴にかけて4ヶ所にそれぞれ2条ずつ沈線を施しています。灰釉陶器の長頸壺は愛知県の猿投山周辺で焼かれたと考えられ、そ

の流通範囲を知る重要な資料といえるでしょう。鉢の大きさには大・中・小あり、7には水瓶と同じ沈線が施されています。これらはその独特な形態から、一般に鉄鉢形土器と呼ばれるものです。鉄鉢形土器は托鉢用の鉄鉢を模倣したもので、島根県下でも出雲国分寺、隱岐国分尼寺、四王寺（松江市山代町）といった古代の寺院跡から出土しており、仏具として使用されていたと考えられています。土師

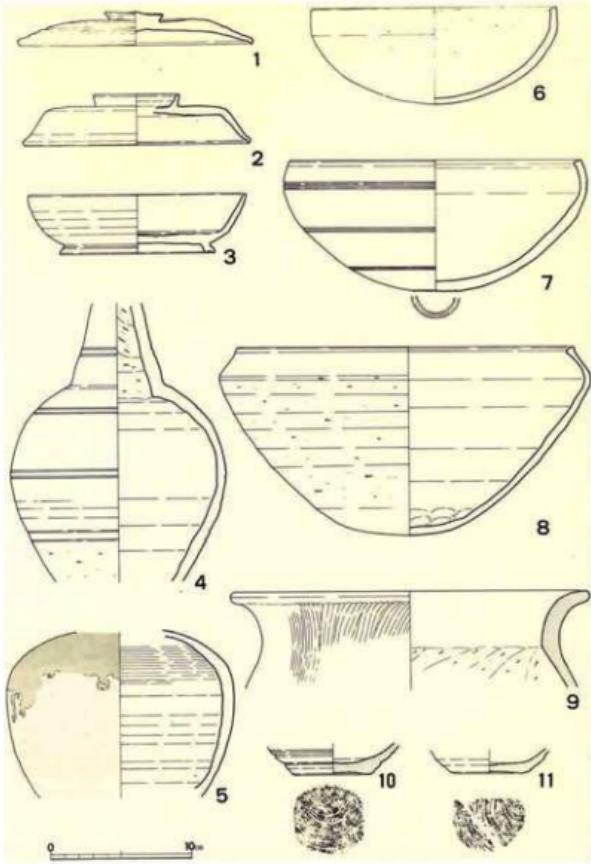


図4 根ノ木田遺跡 D区出土遺物実測図

器・壺の外側にはススが付着し、使用された痕跡がみられます。土師質土器・壺は口クロ成形で、底部を回転糸切りで切り離しています。これらの土器の年代は9世紀後半から10世紀前半にあたり、平安時代前期と考えられます。

D区からなぜこのような土器が出土したのかはわかりませんが、周辺部も含め、建物跡のような明確な遺構が存在しないこと、蓋壺や水瓶のように焼きひすんで実用には耐えられないものがいくつか含まれていること、鉄鉢形土器といった特殊な土器が出土していることなどから、仏教にまつわる祭祀が行なわれた可能性があります。

以上、C区とD区を中心根ノ木田遺跡の概要を述べました。これら以外にも、H、I区から平安時代前期の須恵器を、D、K区からは内面焼けた土坑を検出しました。性格は明らかにすることができませんでしたが、H、I区の土器は祭祀に使用されたものかもしれません。



写真2 根ノ木田遺跡 出土土器

## フケ田平遺跡（第10地点）

昨年度の調査で確認したD区の集石遺構とその周辺を対象に発掘を行い、新たに炭焼き用の大形土坑（長辺2.2m、短辺1.9m、深さ0.6m）を1基発見

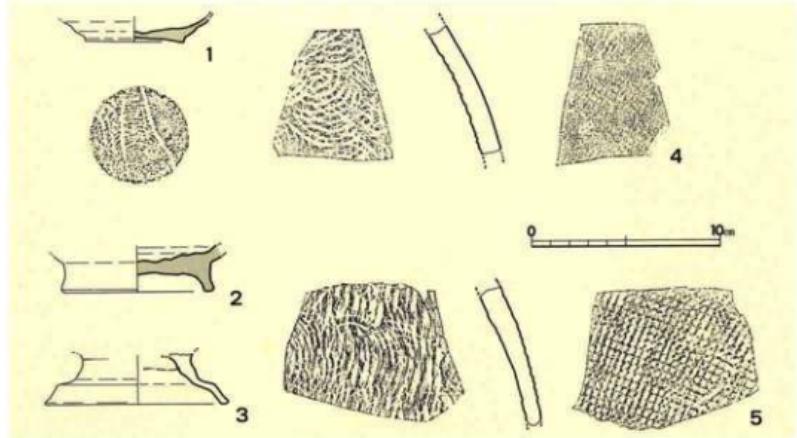


図5 フケ田平遺跡 D区出土土器実測図

しました。また、弥生時代の磨製石斧も一個出土しています。

集石遺構については、以下詳しく紹介します。

### 集石遺構

見晴らしのよい尾根の最も高い所にある遺跡です。

一辺 10 m 程の範囲に、付近の谷間から運ばれた人頭大の円礫(約 300 個あまり)が隙間なく置かれています。この石は厚さ 0.2 m から 0.3 m の盛土の上にあり、葺石状に見えます。地表面を少し掘り下げるとき、小さく不整形な土坑が 10 個ほど出てきました(写真 3)。大きさは 1 m 前後で、深さも 0.2~0.4 m と浅いものです。出土品などではなく、この穴が何のために掘られたのかは明らかではありません。この遺構に伴う遺物としては集石付近およびその西側に当る緩斜面より多くの土師質土器とわずかな土師器と須恵器の破片が出土しています。土師質土器もすべて破片となっており完形品はありません。図 5-1、2 のように壺には糸切り底と高台付きの二種類ありますが、多くは糸切り底のものです。須恵器は甕の破片と壺などの脚の一部が出土しています。甕の中には表面に格子状の叩き目をもつもの(図 5-5)も混ざっており、平安時代から鎌倉時代のものと推定されます。

遺跡の性格については、定かにする資料はなく、不明といわざるを得ません。しかし、人里離れた山間にある集石と破碎された多くの土師質土器などからみて、何らかの信仰に関わる遺構と思われます。

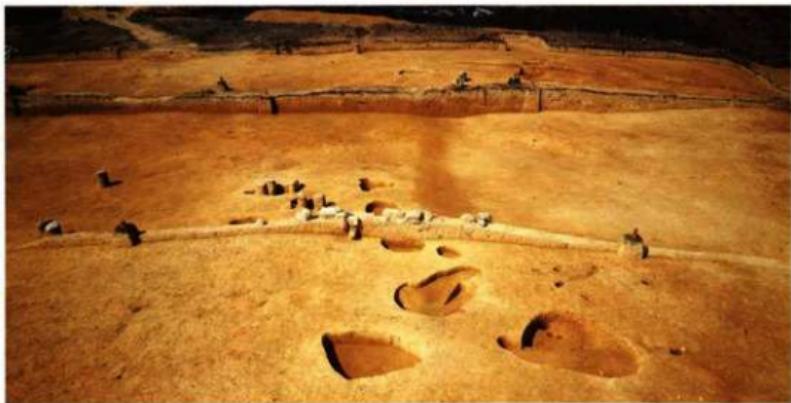


写真 3 フケ田平遺跡 D 区土坑検出状況 (南から)

## 北ヶ迫遺跡（第8地点）

北ヶ迫遺跡は先述した2遺跡のある丘陵に挟まれた細長い谷の最奥部にあり、幕末～明治初頭に日常雑器、赤瓦を生産した窯です。第1次調査では焼き損じた不良品を棄てた物原と作業小屋跡を確認し、今回は物原の完掘を目的に調査を開始しました。調査も終盤を迎えた8月の末、折から進められた空港の建設工事の最中、多数のレンガが散乱している地点を確認し、急拵この地点の調査も実施することになりました。その結果、昭和40年代の牧場造成で消滅したはずの登り窯の一部が遺存していることがわかりました。

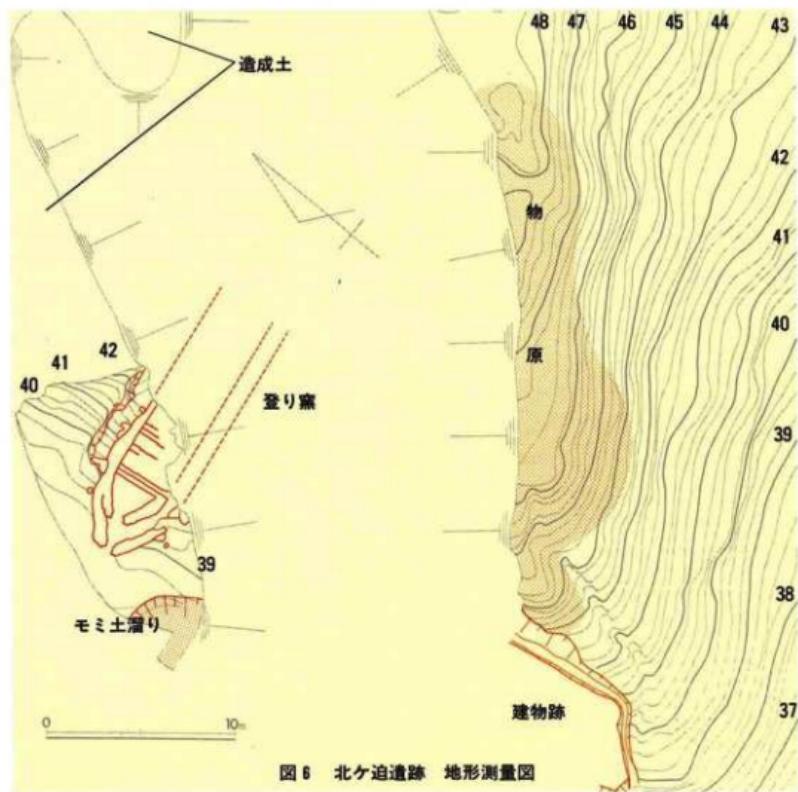


図6 北ヶ迫遺跡 地形測量図

### れんぼうしきのぼり がま 連房式登り窯

窯は前年度調査した作業小屋跡から北西約25mの牧場造成土の下から発見されました。この窯は北東から張り出す丘陵の西斜面に位置します。

厚く堆積した造成土を取り除き、調査が進むにつれ、いくつもの焼成室

(房)を階段状につなぎ合せて構築した連房式登り窯の一種だとわかりました。

た。残っていたのは最下段の焚き口からそれにつづく3つの焼成室までの約7.5mで、上方の房は牧場造成時に取り壊されたものと思われます。したがって、本来の窯の規模は確認できませんが、物原との位置関係から推定すると、焼成室10数房、水平距離にして最大30mほどの規模だったようです(図6)。



写真4 窯の発見  
(中央左が窯 車の右上が物原)

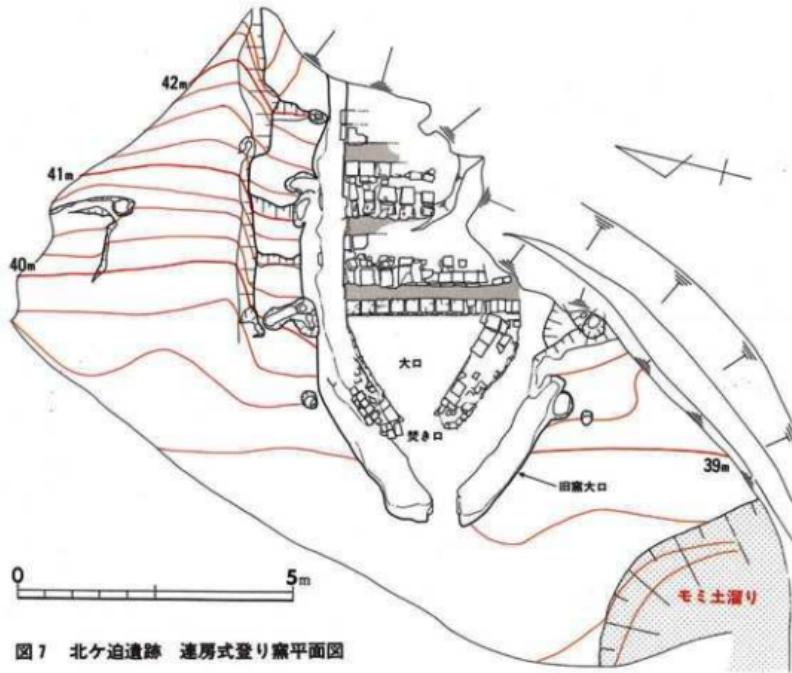


図7 北ヶ迫遺跡 連房式登り窯平面図

### 連房式登り窯の構造

窯の最下段の平面は逆三角形を呈しますが大口（胴木間）<sup>おおぐち　どう　ぎま</sup>と呼ばれる薪の燃焼室で、その前面に焚き口がとりつけられています。この部屋は窯焚きの際窯全体を温めるためのものです。その上方に続く、製品を焼く最初の部屋（寄窯第1房）との間はレンガ壁で隔てられています。大口の炎はレンガ隔壁の下に設けられた火格子穴（通焰孔）<sup>ひごうし　あな　こうえんこう</sup>を通って第1房に伝えられる構造となっています。

窯全体が温まると各焼成室を順次焚き上げます。房内の焚庭（火床）<sup>たきにわ　ひどこ</sup>が薪の燃焼部にあたり房の片側に燃料の投入口が設けられています。投入口は製品の搬入・搬出のための出入口を窯詰め後に塞ぐ際にあけておくようです。北ヶ迫遺跡の場合、窯前面に向って右側にこの出入口がとりつけられていました。

各房の間の隔壁の下にも通焰孔があり、炎は下から上へ、各房内をむらなく循環して最終房の後面の穴（煙り出し）から排気されます。

以上のように、焼成室を細かく区切り、熱効率を高め、製品を確実に焼き上げる工夫がなされている点が、連房式登り窯の特徴といえるでしょう。



写真5 北ヶ迫遺跡 連房式登り窯

## 瓦を焼く窯

瓦を焼く窯には大きく分けて、平地に築く「ダルマ窯」と北ヶ迫遺跡のような登り窯の2種類があります。前者は焼し瓦を、後者は「石州瓦」のような釉薬瓦を焼く窯です。

登り窯は本来陶磁器を焼く窯として近世初頭に朝鮮から移入され、普及した窯の一一種です。これを瓦窯として使うあたり、瓦を立て並べて窯詰めできるよう、窓内にレンガ

を階段状に積み上げた構造をとっています（図8）。

## 窯の維持と築き替え

北ヶ迫の登り窯は丘陵斜面につくられていますが、たち割り調査で窯の構築状況がわかりました。まず、一番低い部分に土を盛り、その上に砂を盛り、これを基盤に焚き口から第1房の窯体を築いていました。この砂層は焚き口付近の湿気を除く役割を果したと考えられます。また、窯の周囲に排水溝を設けるのが一般的で、北ヶ迫では、窯の北西の加工段がこれに相当すると思われます。

窯の上には雨水の侵入を防ぐ覆屋をかけていたらしく、窯の両側壁に平行して掘立ての柱穴が並んでいました。おそらく草葺の屋根をもったものと考えられます。

調査の過程でこの登り窯に築き替えの痕跡を確認しています。焼成室の改築のほか、大口ではその位置を上方にずらして築き替えていました（図7）。この窯場の物原から陶器が多数出土していることから、窯の築き替えが陶器窯から瓦窯への転換を予想させます。

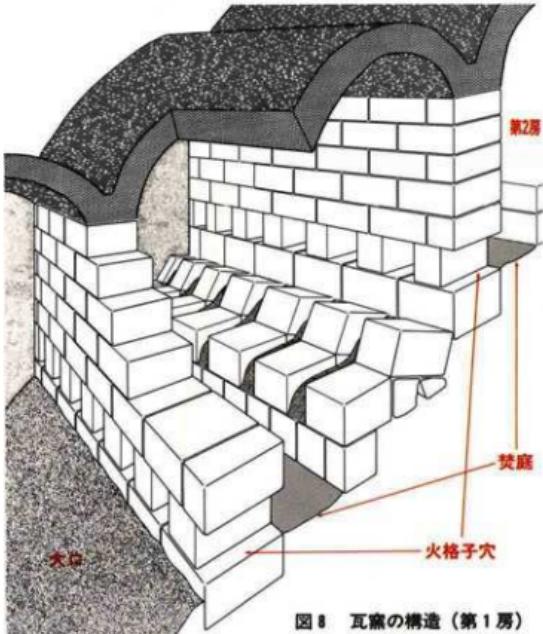
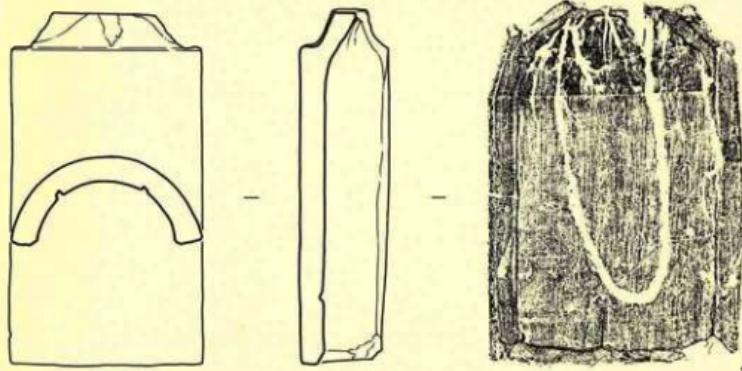
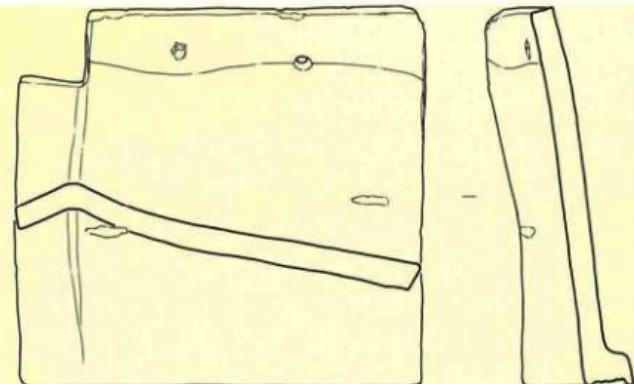


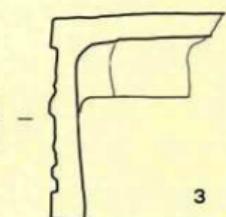
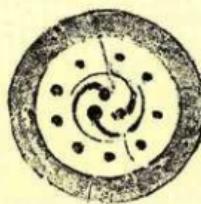
図8 瓦窯の構造（第1房）



0 10cm

図9 北ヶ迫遺跡で焼かれた瓦

- (1. 軒 桂 瓦)
- (2. 丸 瓦)
- (3. 軒 巴)



3

## 石州瓦

北ヶ迫遺跡の登り窯で焼かれた瓦は一般的に「石州瓦」あるいは「石見瓦」と総称される赤瓦です。型式的な分類では棟瓦葺に使う「日本型」の瓦にあたります。これは現在の一般的な民家に使われるタイプのものです。

棟瓦は瓦葺の屋根でもっとも数多く使用される屋根瓦です。軒先に葺く場合は頭に唐草文様の瓦当をもつ軒棟瓦が使われます。棟瓦は祖形となる粘土板を瓦型台の上で一枚ずつ叩いてつくられます。

丸瓦は巴文様の瓦当をもつ軒巴と瓦当のないものがあります。これらの凹面には円筒形の瓦型と粘土が密着するのを防ぐ際に使った布の織り目がのこされています。

このほかにも棟に葺く瓦や鬼瓦など、場所ごとに形の異なる瓦があるようです。瓦全体を通じて色あいは茶褐色～黒褐色を呈し、釉は厚くかけられています。

### 瓦の生産と石見地方

石見地方で赤瓦がいつから作られるようになったのか、詳しくはわかりませんが、江戸時代も終りに近づいた19世紀初め(文化年間)だといわれています。では、なぜ石見地方で赤瓦が作られるようになり、今日まで生産し続けられたのでしょうか?その理由は山陰の風土と深い関わりがあるようです。

赤瓦が盛行する以前は焼し瓦と呼ばれる無釉の黒瓦が使われていたようです。しかし、冬の日本海沿岸部では、水分を吸収する焼し瓦ではいたみがひどく耐久性に欠けるものがあったようです。そこで瓦の表面に釉を施し、耐寒性を向上させ、より寒冷地に適した瓦として赤瓦が作られるようになったのです。

一般民家の屋根替えによる瓦の需要と豊富な陶土、日本海沿岸を結ぶ海運などの好条件は赤瓦の生産を急速に発展させ、資本力の軟弱なこの地に多数の登り窯を出現させるほどの活況をもたらしたようです。それは幕藩体制の崩壊と近代商業資本の発達という時代を背景にした石見地方の近代への歩みといえるかもしれません。



写真6 軒巴（上）と軒棟瓦（下）

## おわりに

調査2年目の今回は4遺跡の本調査と1遺跡の範囲確認調査を行い、以上のような成果をおさめ無事終ることができました。

調査対象地が可耕地の少ない丘陵上ということもあり、時代を通じ山と人の関わりを示す数々の痕跡を確認しました。人々の生活は時代ごとに様々であり、現代に生きる私たちにとってはかり知れないことが多いようです。そうした地域の歴史を掘り起こすことが今後も必要となるでしょう。

最後になりましたが、今回の調査にあたりご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、記して感謝したいと思います。

文化庁記念物課 佐賀県教育庁文化課 佐賀県立九州陶磁資料館 有田町  
歴史民俗資料館 益田市教育委員会 島根県土木部港湾課空港整備室  
島根県石見空港建設事務所 石見空港建設特別共同企業体

浅井 亮治、飯塚 由美、家田 淳一、石川 治男、磯村 賢治、伊藤 晴明、  
伊藤フサノ、岩本 末子、岩本 哲夫、大久保 敏、大久保真紀、大島 操、  
大橋 康二、大庭 忠、岡崎 秋広、岡崎 義人、岡崎 礼一、岡本 寅雄、  
加藤 玉代、木原 光、喜村 昭司、桐山チヨ工、桐山マサ子、久保田久子、  
久保 智康、桑原 伝、桑原 喜雄、斎川 敏子、佐々木二良、篠原 益夫、  
杉内恵美子、須田 勉、角 千賀子、宅野 来、宅野 千義、宅野マシ子、  
竹下 浩征、田中タケ子、田中七五郎、田中 義昭、田原 淳雄、田原 清、  
田原 澄子、近重 克幸、都野森米子、時枝 克安、豊田 俊晴、中島 陸輔、  
永安ユキ工、西山 智子、原田 敏照、平末てるみ、藤井玄太郎、増野 隆一、  
松田ミサヨ、間庭二三枝、三浦 三夫、椋木 義幸、村上 勇、村上 伸之、  
守岡 正司、矢野美奈子、山川 福一、山口 和美、横山 知子、和崎 幸子、  
渡辺 一雄 (敬称略)

〔本冊子の執筆、編集には文化課埋蔵文化財第3係〕

文化財保護主事 西尾克己 主事 熱田貴保

臨時職員 佐藤雄史があたりました。

石見空港建設予定地内遺跡発掘調査概報Ⅱ  
——根ノ木田 フケ田平 北ヶ迫 ——

---

発 行 1990年3月31日  
編 集 島根県教育委員会  
〒690 松江市殿町1番地  
Tel (0852) 22-5946  
印 刷 黒 潮 社

---

表紙 遺跡とその周辺を西から望む  
(アジア航測株式会社提供)